■特集・さて、どう生きようか――若者の軌跡

失なえぬもの

●ワークキャンプ、梁山泊……

阿木幸男
（FIWC関東）

僕は、仲間たちと、群馬県渋川の榛名山近く、前に赤城山を臨み、後に水沢山が控える地に、「梁山泊」と云う名の家をポチポチと四年の歳月をかけて建設中である。

まだ建設途中であり、長い道のりである。物理的な意味での完成はこの七月になりそうである。それは家の形ができて住めるということであり、僕らがめざしている〝ホームとしての家〟ができあがるには、まだまだ多くの時間を必要としている。

僕らが建てるのは、単に物理的な〝場〟としての家ではない。人と人との関わりがストレートに結べる、お互いがお互いの〝何ものか〟を自由に吐露しながら、相互に存在を認めあい、「こうして生きている」と素直に実感できる、そんな家――いずことなく、人が集まり、散っていく、そんなホームなのだ。

これだけの説明では、きっと何が何だか、よくわからないかも知れない。まずは、この家を建て始めた頃のことや、今僕が思っていることなどを話してみよう。

♣

僕は〝ワークキャンプ〟なるものに、この六年間かかわっているが、そのことから始めてみよう。

六年前、長期のストライキで入学が遅れて大学の門をくぐると、そこは荒廃しきっており、大学生活の絶望的な出発だった。期待半分といえ、一年生の僕は、自分が入りこんだおかしな世界にとまどいを覚えるばかりだった。そのとまどいと怒りで、集会やデモへ参加して行ったものの、〝体制〟を切り崩すべく組織されたものの内部が奇妙にねじまがっているのを知り、一層とまどいを覚えた。

そのころ、新宿の街と錯覚するほどのキャンパスの人ごみの中を歩いている時、一枚のポスターが眼にとまった。「ワークキャンプ」という文字がこじんまりしたポスターの〝シャベル〟の絵の上に浮きぼりになっているのがとても印象的だった。そこには、次のように書かれていた。「主義主張、思想、国籍、信仰信条、社会階層等あらゆる既成概念を超えて、人間皆兄弟の精神を基盤にしてより良き社会の建設を！……」

その時、おぼろげながら、その意味するであろうところを漠然と感じたにすぎないが、「何かがある」という思いを強くもった。期待よりも、多分に、好奇心から、その事務所へ連絡をとってみた。早速、パンフレットと自筆の親切な手紙とワークキャンプへの誘いがあった。それで、参加してみようという気にもなり、山梨県の山奥の養護施設でのワークキャンプにノコノコと足をのばしてみた。

♣

「キャンプ」ということなら、経験がなかったわけではない。毎夏、中学時代の悪友たちと山へキャンプへ出かけていたし、おおよそ、同世代の連中が集まるキャンプがどんなものか、想像するにむずかしくはなかった。

しかし、実際は、そのありふれた想像を超えたところにそのワークキャンプがあった。まさしく、新鮮な感動を覚えたのである。何に感動したかといえば、人が集まって、共同して生活するという、そのことであった。生まれてこのかた、思えば、人と共に生きてきたのであるから、こととさらに、かような感動を覚えたということは不思議でもあった。「こうして人が集まって、生活するってのはいいなあ！」と感じいってしまったのである。

〝一人一人がのびのびと自分のしたいことをしているというかんじで生きている、そんなつながりのすばらしさ〟をとてもさわやかに感じとったのだ。

考えてみると、本来共同社会であるはずの僕らの社会が、どうして変にねじまがり、チグハグなのか。〝やさしいこと〟が全く〝むずかしいこと〟になってしまっている。ヘソ曲がりのオバケなんだ。「どうなってるんだろう？」と思ったね。どこを見ても、奇妙にねじまがってしまってるんだから。

自由に、気の向くままに集まってきた連中が、同じ釜の飯を食べ、同じように仕事に汗を流し、終りなき議論に口角泡をとばし、眼を輝やかす――それ自体に、僕は〝ワークキャンプ〟なるものを感じたのだ。一週間のキャンプが終って、みんなと別れる時は、さすがにさびしさを覚えた。単にセンチになったわけではない。せっかく、できつつある、僕らの共同空間、関わりが、音もなく消えて行くようで、それがさびしかったのだ。

その頃、〝共同体〟という言葉は僕の中にはなかったが、自分が生きて行きたい社会の有様が、おぼろげながら心の中に形をなそうとし始めていた。マルクスの本をかじったことよりも、僕にとってはワークキャンプ経験がズシンと〝これからの社会〟を、実感として、暗示させてくれた。しかし、それはあくまでもヒントであって、解答ではなかった。それは初めの一歩であって、奥行きはずっとずっと深く長い道程であることを知らされたのは、その後のキャンプを通してであった。

♣

それ以来、僕はワークキャンプに病みつきになってしまった。次から次へと開かれるキャンプに、ことごとく参加した。古い日記をひもといてみると、よくもまあ出たものだ。山谷、高橋でのスラム・キャンプ、精薄施設、身体障害施設、養護施設、ライ療養所、砂川キャンプ……等。主として施設キャンプが多かった。ちょうど戦後復興から社会福祉施設に眼が向けられた期時で、ワークキャンプも自然と、施設でもたれることが多い時期であった。まだまだ、物質的に恵まれぬ施設が多かったし、僕らの手を早急にのばさなければならぬ場が多かった。

そうした行為に疑問がなかったわけではない。自衛隊への軍事予算が倍増するのに、福祉予算はさして増えぬという情況の中で僕らの行為が無意識に為されるなら、単なる〝肩代り〟以外の何ものでもなくなってしまうのではないか（「ごくろうさま」と言われて戻ってくるだけの〝与える側〟と〝受ける側〟の関係にとどまるなら）。ワークキャンプそのものが思想的な核を内包することなしに、いかなる視点から社会問題を見つめようとする

のか。

人間皆兄弟＝シュバイツァーという風にあまりにポピュラーに使われ、安易に言葉がフワフワと行き交う時、ある種の抵抗なしにはその言葉を用いることはできなくなっていた。

毎回、新メンバーに配られる、パンフレットの一言一言がある慣習のうちに、容易に手渡されていく時、言葉は僕らから勝手に離れて行ってしまっているのではないか。親切と思える行為がまさしく無責任以外の何ものでもなかったり、僕らの発する〝目的〟という言葉にひそむ、僕らの〝思いあがりぶり〟。ものごとを、ある共通性を基に、あっという間にひっくるめ、まとめて、抽象用語の枠に押し込んだりする思考に、抵抗を覚えるようにもなった。さまざまな疑問や迷いがクル・クル・クルと回り始めていた。

頭の中で言葉が右往左往するようになると、そのうち、勝手に動けという気分にもなってくる。まあ〝こんなかんじで生きて行くなら、ゆかいではないかと思える関わり〟を基本的に大切にしようと思った。それは言葉に置きかえるとあまりに貧しいものであり、また、うまく、言葉にできないものである。今も、あれから五十歩百歩である。

♣

そんな迷いをもった六八年の夏、群馬県渋川にある重症身体障害者のための施設「恵の園」の建設基礎工事キャンプをもった。その時、恵の園建設予定地の無償提供者である、地元の後藤氏と知りあった。

後藤氏宅のとなりにキャンプを張った関係で、何かとお世話になり、夜は、酒を酌交し歌を唄い、語りあい、後藤氏の人柄に一層の親しみを覚えた。後藤氏は、僕らが借用させていただいた後藤氏宅のトイレを毎日欠かさず、掃除するのを見て、とりわけの感概をもたれたようであった。

後藤氏は戦後、その地に入植し、並々ならぬ苦労をして、荒廃していた山地を、開墾した。血と汗と涙の日々であったことであろう。苦労した土地だけに「社会のための使用を！」と考えてこられ、その多くを恵の園のために無償提供されたのだった。十日間のキャンプ中での後藤氏との語らいは、僕の胸の中に熱いものを残した。

その年の十月、恵の園第一期工事完成式に出席のため、僕らは出むいて後藤氏に再会した。その式の後、後藤氏から「全国の青年たちが集まって語り合い、そして、より良き社会のために力を合わせていく、そんな家をつくらんか。場所はワシの残っている土地を使えばいい。」と提案があった。とてもうれしい申出に喜んで即答した。その時に「梁山泊」は始まっていた。

その時、正直に言って、〝家〟というイメージ、それまでの運動を支えてきたパトスが〝家〟という形で具体化される時に〝動くもの〟にとりつかれたのかも知れない。

その時、確認しあったことと言えば、我々の生きる権利を最大限に保障する社会のモデルとしての家、そして、人間がお互いを愛し認め合いながら、現在の社会の変革を志向する運動の拠点となる家、自己否定をくりかえしつつ、より人間らしく、自分らしく生きていく人間の交流の家、そして創造活動の場としての家にしようではないか、ということだった。大義名分の言葉なんて必要なし、〝目的〟や〝説明〟の言葉をベタベタとひっつけることもあるまいとも思った。僕や君、彼、彼女がどんなふうに生きていくかに関わるところに〝家〟はあり、あくまでも、僕らの生きている、それ自体が重要なのだから。

♣

この四年間、本当にさまざまなことがあった。大学を中退する者、「農業共同体をつくるんだ」ということで、農業技術修得のため北海道へ渡る者、部族のコミューンへ行く者、全国を彷徨する者、会社を辞めて土方になる者……さまざまに思索し、実践してみた。仲間の一人一人の動き、変化がピンピンとお互いに伝わって行った。そして、いつの間にやら定職なしの自由な身になっていた。すごくストレートなかんじで、仲間との関わりの中で生きているんだと思うようになっていた。

こうした中で、山岸会の北海道の農場へ行った者たちが、すばらしい仲間をつくって戻り、その仲間の集まりを「藍の一族」と名づけた。その名は詩人の草野心平氏の詩から拝借したものである。

「：もしも黄が人民の地理の色だとするならば人間の色も同じく黄でありそれと闘ひ飽和するために藍は生れた。そしてこのなんとも美しいだんだんが何千年と永く永くこの国土に栄えているのは寒暑にもよく経済にも堪へる洗ひざらし。天と人との不思議な混淆によるものだろう。この発見。この秘密。自分は深く息を吸いこの伝統を讃嘆する。

南方亜熱帯のデルタの藍や。北の流沙の貧しい藍の群れ群れや。道ばたで息をひきとる乞食の藍や。夜宴の貴顕の藍の礼装。河北のぼうぼうのなかで。パステルの道をゆく百姓の藍の行列をみた。江蘇のぼうぼうのなかで鋤にもたれて動かない百姓女の藍をみた。冬の日輪しづむ黄土の涯から闇はわき藍はぼんやり消えさうだった。

ああ。なんたる花浅葱。薄群青の。オリエンタルブルーの。なんたるコバルト。ウルトラマリンの。ウルトラマリンアッシの。なんたる藍の一族共。この国に生れ。この国の未来に流れてゆく藍の一族。この国の未来に流れ流れゆく藍の一族。なんたる美しい藍の一族。……」

♣

この頃、思うのだけれど、僕らの既成の言葉があらゆる関わりの弊害になっているのではないか。僕らの発想というものが、ある無意識な既成事実ないし既成用語の容認という前提の上に成り立っているのではないだろうか。いつしか、自分を、人間を中心として世界を、宇宙を、回転させる思考をとっているのではないだろうか。対象を、問題を自己に徹底して引きつけてみるという行為が、ある所からつき離すことになってはいないだろうか。知らず知らずのうちに、距離というものが、林立するビルの谷間の人込みの中で何十センチ、何メートルという単位で測られるという日常が近視眼的にさせてはいないか。どこかでどこかで、誤ちを犯していることに気がつくことなしに、時が過ぎているのではないか。見るに無残なドス黒い泡や眼の突然の痛みにあわてふためいているのではないか。ゆっくり首をしめることを教えたのは誰だ！

ささやかな、ちっぽけな存在としての〝人間〟を〝自分〟をみつめてみよう。大自然における〝人間〟の位置というものをみつめてみよう。何かがきっと、今から、逆転して行くだろう。〝文明〟と云う漠とした怪物にのみ込まれてしまったもの、〝進歩〟〝発展〟という、まやかしの言葉に気をとられているうちに、置き忘れてしまったもの、見失ったもの、それらは何であるか。

人と人との関わり、物と人との関わり、それぞれの関わりの糸をたぐり寄せてみよう。思い切って、お互いに手をのばしてみよう。関わりぐあいやあらゆる「価値」への信仰を再検討してみよう。

面白おかしく生きたい

——横田基地に通いつづけて——

中山　明
（安保拒否百人委員会）

〈おさらば……〉

二年前の六月二十三日、僕は横田基地にすわりこみにいった。あわせて四十人以上の仲間と一緒だった。あの時以来、僕の二年間の生き方は横田基地と切っても切り離せない。

僕は七十年安保という一見かたい手ざわりのなにかをめざしてこの数年を生きてきたのだけど、七十年六月を経験してみると、七十年安保なんて「かたい」ものなんかなかったような気がする。語りつがれた六十年安保闘争と殺された樺美智子さんのあの写真が僕を錯覚させていたようだ。「七十年までは」「七十年にはなにかある。」「十年の恨みを爆発させるんだ。」、こんな莫とした幻想が僕の心にあった。

六月二十三日、横田基地ゲート前四十人の座りこみ。その座りこみの中で、僕は七十年安保革命と樺美智子さんにはおさらばした。これからはつかみどころのない、巨大な壁—安保にむかって、あらためて「すわりなおして」生きてゆかなくちゃ。

僕達は長い討論をした。合宿もした。「日常生活があって、ある日どこか国会前や、基地の前にすわりこんで、そして又日常があって……それでいいんだろうか。」「あの〝七十年安保〟にむかって燃やした情熱は永久につづくのだろうか」「安保条約つぶせという政治的運動はもう力をもてないのでは。」……。

〈横田お百度詣り〉

私たちのグループ—安保拒否百人委員会の一応の結論は、「今こそ十人委員会を作り活動を強化してゆこう。十人委員会という小人数のグループの日常的反安保の闘いが必要だ。日常生活のいたるところにアンポがあり、アンポを支えているものがある以上、日常を変えていくことを考えなくちゃ。十人委員会の活動の中から百人委員会、千人委員会運動も考えてゆこう。

さて、僕は横田十人委員会の活動に参加することにした。すぐ近くのこんな大きい米空軍基地を黙って見すごしておくテはない。安保の実体の一つがこの横田基地なら、ひとつこれに体当りするのもいいだろう。

横田十人委員会は当初は四人。四人で話しあって隔週土曜日に横田基地にビラ配りにゆくことにした。東京に近いとはいえ、僕らは地元の人間というのでもない。少なくとも二年位はつづけてやってみよう。そうすればそのうち運動として定着できるかも知れない。二週間に一度位なら続けていけるんじゃないか。土曜日をえらんだのはつとめ人が多かったからだ。こうして、僕の「横田お百度詣り」がはじまった。

〈胎動……〉

二年の間に色々なことがあった。

米軍兵士に対するゲート前でのビラ配り、周辺住民に対するビラ配りは今も欠かさず続けられている。ゲート前でのすわりこみはその後二回。一度は座りこんだ三人全員が逮捕された。（二泊三日で釈放）

基地の兵士との接触が深まるにつれ、横田基地にもGI運動が定着してきた。PCSの事務所が基地の前のハウスに店開きした。一年前のことだ。PCSというのはパシフィック・カウンセリング・サービスの略で米軍兵士の様々な相談にのるのが仕事だ。このPCSのハウスにはアメリカ人の活動家が二人と、PCSとともに米軍解体を目指すジャテックセンターの日本人活動家が三人住んでいる。このハウスは附近にすむ米兵たちのたまり場であり、パーティもあるし、ミーティング、映画会なんかもときにはある。

こうしたGI運動の急速ともいえる進展に対して、基地住民の運動の進み具合はとてもゆるやかだ。私達は数人の地元の若者達と知りあいになり、多くの共同行動をしてきた。彼らは今、基地の前のハウスをかり、共同生活を送っている。基地住民若者の運動はこうして、ほんのわずかだけど存在する。でも中年や年寄りの運動といえばもうほとんどないみたいなものだ。残念だ。

ちょっとかれらの共同生活を紹介してみよう。日米あわせて五人が住んでいるPCSの共同生活は日米一緒だけに最初は色々大変だったみたいだ。三部屋の個室を上手に使っている。食事は外来者には朝昼は五十円、夕は百円で作ってくれる。自分達では食事表を作ったりして、負担しあっている。

一方地元の若者達は、3LDKに、3人だから、それぞれに個室があって、これはそれぞれにある程度の独立性を保ってやっているようだ。僕がいくとおそろしく汚れていたり、ときにはとてもきれいに片づけてあったりする（L：共同の部分が）。

〈生活が変わる〉

二年の間に横田十人委員会のそれぞれも生

活を変えている。

Aさんは赤ちゃんを生んで育てていて、しばらく横田にはこられなかった。でも子供も少し大きくなったし、「子供をつれて、ゲート前にゆこうかしら。」なんて連絡が最近になってきている。Bさんは三里塚へ行ってしまった。去年の第一次代執行以来、三里塚に通いつづけ、農民とともに闘っていたBさんは、とうとう現地に小屋をたてて住みついてしまった。子供も三里塚で生むことになっている。横田にはデモがあったりするとやってきてなつかしがったりしている。Cさんと僕は相変らずの横田通いだ。

僕の場合、横田ゆきはスケジュールの中で一応最優先だ。二週間に一日位ならどうってことないと最初は考えていたけど、月に二日の土曜日が確実につぶれるというのはサラリーマンにとってはなかなか大変なことだとわかった。始めは一生けん命だったから次の土曜日が待ち遠しいこともあったけど、そのうちに「あ、もう土曜日か、横田へゆく日か、やれやれ」なんて考えたりすることもあるようになった。それでも最近は慣れてきて、普通の気持で横田へゆく。といっても二週間に一度では少し日常から飛び出しているという感じをやっぱりもってしまうようだ。

僕は一年位前から「十人委通信ヨコタ」という連絡みたいな、ミニコミみたいなものを作りはじめた。発行部数は約四〇部。これを書いて印刷するのは仕事から帰って、夜二日分の仕事になる。

住民向けのビラ「基地のある限り」はもう37号まで発行した。これは交替で作っているけど七百枚位は印刷する。

最近ではあとでのべるタコ作りが夜の仕事だ。今までに三十個以上は作っている。

又、僕らは米軍兵士に配る英文のビラを自分達で読むため月に二回位づつ集ってきた。

実際の行動は二週間に一回でも、準備やあと始末、勉強と、意外と多くの時間を〝ヨコタ〟にさかねばならない。僕の生活スケジュールはだからヨコタを中心に動いている。

〈おもしろおかしく〉

僕は人生、生まれてきたんだから、とにかく生きれば良い、と考えている。ただ生きるより、面白おかしく、楽しく生きてゆければそれにこしたことはない。

でも残念だけど、現在の社会ではそうおもしろおかしくは生きられない。変な物質欲ばかり次々にあおられて、どんなに豊かでも満足できない。いつも精神的にうえさせられてしまう。

それに、第一、ヴェトナム戦争を片目にみながら、そうおもしろおかしくしていれるだろうか。僕にはそんなことはできない。だから僕は七十分の番組のうち二十分のコマーシャルをみて精神的にうえたりしないで「〇〇にカンパを。」とか「署名をして下さい。」「このパンフレットを買って下さい。」なんて名もなく荒野に叫ぶ人々のコマーシャルに耳を傾けようと思っている。

そして、生活を支えるための最小限度の（まあ巾があるんだけど）かせぎは別として、なるべく質素に飢えを感じない程度に安上りにくらしてゆきたいものだ。

さしあたりこの生活の中心は横田お百度詣りだ。それは、今、ヴェトナムのことをぬきには他の生活が考えられないからだ。それに僕にはこんな生活がけっこう、おもしろおかしいのだ。だいいち僕達の力で横田基地が非常な影響を受けるなら、基地がなくなるなら、ヴェトナム戦争が終るなら、これほどおもしろおかしいことは他にないのではないだろうか……。

〈タコに傾く飛行機〉

最後に僕達の近況を少し。今年の二月から横田基地では基地の機能を直接とめるための新しい運動がはじまった。基地の滑走路の近くにいって〝タコ上げ〟をしようというのである。タコが飛行機に影響を与えるかも知れないということは岩国基地での経験でわかっていた。僕達は、今年一月三日の立川タコ上げ（ヴェトナム反戦ちょうちんデモの会）に刺激されて、横田でもやろうと考えた。

二月十一日ついにヨコタにもタコはあがった。前日来の冷い雨の中、うるさい警察の妨害をしり目にタコは上った。その日、タコを避けようとしてグラリと傾いた飛行機の姿を僕らははっきりと見た。

三月二十一日・四月二十九日・五月十三日とタコ上げは続いている。私達は経験を蓄積しつつある。タコ上げはいかなる法律にてらしても違法ではないこと。にもかかわらず警察は実力で妨害すること。タコ糸は千メートルも伸びるので風さえ吹けば、あらゆるところからタコはあがってゆくこと。

基地の中からも、よい知らせがあいついでいる。タコ糸にぶつかった（今までに三機）パイロットが大変怒っているらしいこと。（〝今度やったらガソリンをぶっかけてやる〟といったという話もあるくらいだ。）基地側が「現在横田ではタコがあがっていて危険なので、横田への飛行は見合せてほしい。」と関係基地へ打電したこと。基地→警察には連絡があって、それで警察が出てくること…。

僕達のタコ上げ大会は確実に空軍基地への影響を与えている。これは確信だ。これからは今は月一回のタコ上げをどんどん日常化してゆけばよい。そうすれば横田基地は米軍にとって使いづらい基地になることは間違いないだろう。

〈住民の基地白書〉

僕たちは更に、住民による基地白書を作ろうとしている。すでにある資料や調査とは違って、僕達の作る白書は住民のナマの声を中心にすえて作ってゆきたい。白書を作る過程で、一人一人の住民を訪問し、横田基地のすべてをききとってゆきたい。そうしてでき上った白書をもって、僕たちは再びそれぞれの家にいってみようと思う。生活におわれ、巧妙な管理社会の網の中で切り離され、軍事基地の存在に疑問を持ちながら有効な表現をもてない一人一人の住民が、お互いのなまの声をききあって手をつないでゆけたら……。

どうやらもうしばらく僕はヨコタとともに生きてゆくことになりそうだ。僕はおもしろおかしく生きてゆこうと思っている。

広告

ミニコミセンターニュース

■内容　ミニコミ情報、ミニコミ活動の方向の追求、ミニコミ活動の条件整備のための連絡と意見の交換、ミニコミ活動者の意見発表

■購読料　一部五〇円。ただし原則として六ヵ月分三〇〇円、一年分六〇〇円を前払い。

■発行　月刊（毎月二〇日）

■申込方法　郵便振替（東京一三三七三三）、現金書留、切手（その場合は二〇円切手）で。

■申込先　東京都港区新橋五丁目一七番二号　日金ビル　日本ミニコミセンター